

司式：佃 雅之
奏楽：橋本恵美子

前奏：「神の御子は来たり給う」（J.G.ワルター）

招詞：新しい歌を主に向かって歌え。全地よ、主に向かって歌え。主に向かって歌い、御名をたたえよ。日から日へ、御救いの良い知らせを告げよ。（詩 24.9-10）

讃美歌：6「つくり主を賛美します」

交読詩編 29.1-11

- 01 【賛歌。ダビデの詩。】神の子らよ、主に帰せよ/栄光と力を主に帰せよ
- 02 御名の栄光を主に帰せよ。聖なる輝きに満ちる主にひれ伏せ。
- 03 主の御声は水の上に響く。栄光の神の雷鳴はどどろく。主は大水の上にあります。
- 04 主の御声は力をもって響き/主の御声は輝きをもって響く。
- 05 主の御声は杉の木を砕き/主はレバノンの杉の木を砕き
- 06 レバノンを子牛のように/シルヨンを野牛の子のように躍らせる。
- 07 主の御声は炎を裂いて走らせる。
- 08 主の御声は荒れ野をもたえさせ/主はカデシュの荒れ野をもたえさせる。
- 09 主の御声は雌鹿をもたえさせ/月満ちぬうちに子を産ませる。神殿のものみなは唱える/「栄光あれ」と。
- 10 主は洪水の上に御座をおく。とこしえの王として、主は御座をおく。
- 11 どうか主が民に力をお与えになるように。主が民を祝福して平和をお与えになるように。

朗読聖書①申命記 30.11-14

- 11 わたしが今日あなたに命じるこの戒めは難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。
- 12 それは天にあるものではないから、「だれかが天に昇り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。
- 13 海のかなたにあるものでもないから、「だれかが海のかなたに渡り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。
- 14 御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。

朗読聖書②ルカによる福音書 12.1-3

◆偽善に気をつけさせる

- 01 とかくするうちに、数えきれないほどの群衆が集まって来て、足を踏み合うほどになった。イエスは、まず弟子たちに話し始められた。「ファリサイ派の人々のパン種に注意なさい。それは偽善である。
- 02 覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはない。
- 03 だから、あなたがたが暗闇で言ったことはみな、明るみで聞かれ、奥の間に耳にささやいたことは、屋根の上で言い広められる。」

祈祷

天地の創造主にして全能なる活ける真の神、あなたの尊い聖名を褒め称えます。

主なる神。この朝、私たちはあなたを礼拝する為に、この礼拝堂に集い、またライブ配信を通して、夫々の場から、あなたの御前に招かれています。場所は異なっても同じ主に呼び集められ、同じ恵みに与る者として、今、共にあなたを仰ぎ見にいます。どうか主よ、喜びの中にある者にも、重荷を負っている者にも、迷いの中にある者にも、疲れを覚えている者にも、あなたの変わる事のない愛と憐れみが注がれますように。この礼拝において、あなたご自身が語り、整え、慰め、励ましてくださいますようお願い致します。

主よ、私たちはあなたの御前に立つとき、あなたが示してくださった深い愛と、日ごとに注いでくださっている豊かな恵みを思い起こします。しかし主よ、私たちのこの一週間の歩みを振り返るとき、あなたよりも自分を中心に置き、御言葉に聞き従うことよりも、自分の都合や判断を優先してきた私たちです。どうか、私たちの罪を赦し、再び、あなたに立ち返る道を備えてください。この礼拝において悔い改める心を与え、あなたの御心に従って歩む者として造り替えてくださいますよう切にお願い致します。

平和の主よ。この地上では、今なお人と人との争いが止むことなく続いています。憎しみと暴力の中で、多くの人々が傷つけられ、尊い命が犠牲となっている現実には私たちは痛みを覚えます。主よ、人間の知恵や力ではなく、あなたの正義と憐れの御力が、この世界に顕されますように。今、恐れや不安に囚われ、先の見えない状況の中に置かれている全ての人々を、あなたが顧み、慰め、助けてください。そして私たちも、また、信仰によってしっかりと立ち、祈りをもって歩み続ける者、そして、この世界にあって、あなたの平和と希望を証しする者としてください。

憐れみ深き主よ。願いながらも、この場に集うことがかなわない兄弟姉妹一人ひとりの上に、どうか、あなたご自身が必要な実言葉をもって臨んでください。孤独の寂しさを覚えている友がいます。老いの中で力の衰えや不安を抱えている友もいます。また、迷いと戸惑いの中に留まり、行くべき道を見出せずにいる友もおります。主よ、どうか私たちが、その一人ひとりの痛みを他人事としてではなく、自分自身の痛みとして受け止めることができる群れとしてください。祈りにおいても、行いにおいても、互いに重荷を負い合う者としてください。真の慰め主であるあなたが、その一人ひとりを親しく尋ねてくださいますように、励まし、導き、必要なときには戒め、また、心と体を癒してください。そしてあなたに信頼して歩み続ける力をお与えてください。

主よ、今日、この礼拝において御言葉を取り次いでくださる説教者を心から感謝致します。大谷昌恵牧師が聖霊の豊か導きと力を受け、あなたの御国の良き知らせを力強く語ることが出来ますように。また聞く私たちの心をも整えてください。御言葉が私たちの心の深みに届き、思いを新たにし、歩みを変える力となりますように、聖霊の助けを切に願い求めます。

これらの祈りを、私たちの救い主、主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌：435「重荷を負う物」

説教 「すべては明るみに」

大谷昌恵

昨年の5月から、この主日礼拝の講壇で皆さんと一緒に、『ルカによる福音書』を読んで参りました。11章の途中から読み始めて、ようやく今日で12章に入りました。この間、主イエスは、悪霊を追い出したりしながら、群衆に囲まれ、徐々に数を増してくる群衆に向かって話を続けてこられました。本日の前の箇所11章の終りでは、ファリサイ派の人々から食事の招待を受けられ、その席でファリサイ派や律法の専門家たちを批判されたりも為さしていました。そして本日の12章です。

ここでは先ず、「とかくするうちに」と、ある程度の時間が経過したことが語られています。「とかくするうちに」とは、「その間に」という程度の意味です。それは単に時間が経過したことも表していますが、それと同時に、イエスを取り囲む周りの状況が変化したことも示しています。本日の箇所の直前、

11:53 では、「イエスがそこを出て行かれると、律法学者やファリサイ派の人々は激しい敵意を抱き、いろいろな問題でイエスに質問を浴びせ始め、何か言葉じりをとらえようとねらっていた」とあります。ここで、ファリサイ派や律法学者が激しい敵意を抱いたのは言うまでもなくイエスに対してであり、イエスの語る事柄から言葉尻をとらえて何かしらの言いがかりをつけようと狙っていたのです。つまり、この 12 章の冒頭での「とかくするうちに」という言葉には、このようにイエスを取り囲む状況が次第に悪化し、イエスに対する陰謀を企てるファリサイ派や律法学者たちが無数に集まって来たことも表しています。

「互いに足を踏み合うほどに膨れ上がった群衆たちの中であってイエスは、まず弟子たちに話し始められた」とあります。ここまでのところでは、群衆がいる中では、イエスは群衆たちに対して話をしてこられました。しかし、この時は群衆に対してではなく、まずご自分の弟子たちに対して語られています。イエスはこの時すでに、ご自分が天に上げられるためにエルサレムに向かう決意をされていました。つまり、ご自分にはすでに、この世での時間が限られていることを、ご自身で承知されていました。ですから、弟子たちに伝えておくべき事は限られた時間の中で少しでも多く語っておかなければならない、という状況に置かれていました。イエスご自身がそのことを承知して、弟子教育を最優先に進めていこうと決心されていたのです。だからと言ってイエスは弟子たちだけを集めて、限られた空間で教を説いていこうとされませんでした。弟子たちも大切ですが、それと同時に群衆にも伝えていかなければならないと感じられていたのです。弟子たちも大切、しかしそれだけでなく群衆一人ひとりも大切に、ご自分が伝えておかなければならないことを全ての人に伝えようとなさいました。もちろん、そこにいた群衆すべてがイエスの言うことをイエスの語るままに素直に受け取ったとは限りません。ただ、右から左へと聞き流して行った人も多く居たでしょう。いやむしろ、そのような人たちが多かったのかもしれない。しかし、それがわかっていてもイエスは語らずにはいられなかった。夫々の問題、痛みや苦しみを抱えた人々を救うために、少しでもその痛みを軽くできれば、という思いで、人々に対して語らずにはいられなかった。群衆全体ではなく、一人ひとりを見て、夫々が抱えている問題も、群衆全体の問題も、少しでも軽くできるようにと考えておられました。

そのような中で、弟子たちにまず語ったイエス、おそらく、この時の弟子たちはイエスの話を聞くことに精一杯で、イエスと自分たちを取り囲む群衆や、そこに居る人それぞれの問題など考える余裕はなかったでしょう。しかし、いずれ彼ら弟子たちも自分たちがイエスの後を継いで福音を語り宣教して行くときには、このような群衆に囲まれ、その一人ひとりに目を向けることをしなければならなくなります。このことがわかるようになる時まで、イエスは時間のある限り、弟子たちにも、群衆にも語ることを大切になさっていたのです。

さて、ここでイエスが語ったのは、「ファリサイ派のパン種に注意なさい」ということでした。イエスが人々に語る時、自分たちの生活に近いものを譬として用いることはよく知られています。その方が人々にとって分かりやすいからです。今回も「パン種」という日常欠かせない食べ物のことを取り上げています。ユダヤ教の人々は、『出エジプト』を思い起こし、その時のことを忘れないようにするために、今も『逾越祭』には『種なしパン』を焼きます。「パン種」を入れてパンを焼くには、それが発酵して生地が膨らむまで時間がかかります。しかし、ほんの僅かでも「パン種」が入っていれば、パン生地が

膨らみます。良い「パン種」ならその生地も良いものとなり、焼かれたパンも良いパンとなるでしょう。しかし、イエスがここで言う、「ファリサイ派のパン種」とは、決して「良いもの」の譬ではありません。「ファリサイ派のパン種」は人々にとって「悪をもたらすもの」です。ファリサイ派の人々にとって何よりも大切なものは『律法』でした。彼らの最大の関心事は律法遵守で、律法学者の多くがファリサイ派でもありました。

「ファリサイ」という言葉には「分離した」という意味がありますが、これは「律法を守ろうとしない一般の人々から、自分たちを分離した」という意味でファリサイ派を名乗ったとも言われています。「ファリサイ派の人々の持っているパン種は「偽善だ」とイエスは言います。

「偽善」とは辞書を引くと、「心や動機が純粋ではなくても、表面上は善人であるかのよう振る舞うこと」とあります。たとえ、動機が、何か不純なことであっても、律法を守ることが自分たちの何よりも大切なことだと考えたファリサイ派は、まさに偽善者だといえることができるでしょう。「偽善」とはまたギリシャ語(ὕποκρισις)で、「演劇の中で役割を演じること」という意味も持っています。「ファリサイ派の律法第一主義は、お芝居の中での役割に過ぎない」とも言えます。「律法を守ることが大切なのだ」と演じて見せている人々、「見せかけの上辺だけの律法遵守の姿勢を見せているにすぎないのだ」と、イエスは断罪します。

律法を守ることが決して悪いことではありません。旧約聖書を読んでいると律法についての規定が数多く記されていて、それをただ読んでいくと非常に厳しただけの人々を苦しめるために設けられたもののような思いをすることがあります。しかし、決してそうではありません。よく読んでいくと、この律法を守ることによって、人々の生活もまた守られていることがわかります。神は、決して人間を苦しめるために律法を定められたものではありません。では、どうして、その律法を守るファリサイ派を、イエスはこれほどまでに認めようとしなかったのでしょうか。ギリシャ語で偽善を表す言葉には、「神に背く、下心」という意味もあります。つまり、あたかも律法を守るようなふりをしながら、そこには神に背く思いや純粋な気持ちでの律法遵守ではなく下心をもった律法を遵守があるからなのです。

前回お読みした 11 章の後半部分は、ファリサイ派の人々がイエスを食事に招いた場面でした。その話の中で私は、「ファリサイ派がイエスと食事の席を共にすることはしばしばあったことだ」と申し上げました。その事は事実なのですが、そこには純粋に「イエスとの食事を楽しもう」との思いではなく、「隙あらば、その食事の席でイエスを攻撃する材料を見つけよう、イエスを陥れよう」という下心があったのです。これこそがまさに偽善者ファリサイ派の真実の顔だと言えるでしょう。このような「ファリサイ派のパン種」は、良いパンを作るどころか、人々を陥れ、律法を悪用するような人を作り上げてしまうのです。この「ファリサイ派のパン種」には、ファリサイ派特有の高慢さが仕掛けられています。それを教えとしているのがファリサイ派であり、だからイエスは、「ファリサイ派の人々のパン種に注意するよう」に弟子たちに伝えたのです。

ファリサイ派の律法主義が、実は「偽善」であることはいずれ明らかになることだとイエスは言います。それが「覆われているもので現されないものではなく、隠されているもので知られずに済むものはない。」(2 節)というイエスの言葉に表れています。ファリサイ派たちが作り上げたり、あるいは、自分たちに都合のいいように解釈した律法を忠実に、厳格に守ることを求めた彼らの行いは、実は正義の実行と神への愛を疎かにする宗教指導者たちの「偽善」を、いずれ露わにするものであり、それが明るみに出された時、人々はファリサイ派

の「偽善」に気がつくことになるのです。今は人々の目をごまかし、律法主義の名のもとに神への忠実を守っているかのように見えるファリサイ派の舞台上での演技も、いずれ明るい日の下に顕わにされ、その役割も終りを告げることになります。

さらにイエスは話を続けます。「あなたがたが暗闇で言ったことはみな、明るみで聞かれ、奥の間に耳にささやいたことは、屋根の上で言い広められる。」(3 節) ここで、「あなたがた」と言われているのは、イエスが話をしている相手である弟子たちのことです。つまり、弟子たちに対してもイエスはここで注意を促しています。ファリサイ派に対して語られたことが、同様に弟子たちにも当てはまるのです。イエスは弟子たちに、今、ここでイエスがファリサイ派に対して語ったことが、一転して弟子たち自身にも及ぶようになることを語っています。弟子たちは、まるで他人事ひとごとのように聞いていたファリサイ派の話を、一転して、「わが事として聞くように」とイエスに迫られているのです。

ここで言う「暗闇」とは、単に“暗い”ということだけではなく、“心が暗くなっている状態”も表します。つまり、心が神の方を向いているのではなく、暗闇に潜む悪魔に向かってような状態で語っていることも、いずれは光のある明るみで聞かれ、そのことが公になってしまうのです。

「奥の間」とは家の中の一番奥にあつて鍵を掛けることができ、外からは覗き込むことができない部屋のことを表します。そのような場所で語ったことは“誰からも見られることも聞かれることもなく秘密のままにしておく”と考えるのが私たち人間でしょう。しかしそうではないのです。そのような場所で、しかも相手の直ぐ傍の耳元で語られたことであっても、いずれは屋根の上、光の中で言い広められる時が来るのです。部屋の中というのは「暗闇」を表します。それに対して「屋根の上」とは“公の場所”で、皆から見られるところを表します。“どんなに隠れた場所で話されたことでも、それはいつか皆の前で言い広められる時が来るのだ”とイエスは弟子たちに言います。自分たちが言ったことが、自分たちの中でだけ収まると考えてはいけません。それはいつの日か皆の知ることとなるのです。だからこそ弟子たちの語るとは、神の王国と福音でなければなりません。閉じられた場所で語ったことも、それはいつか公の場所で語られ、光の中で公にされるのです。

イエスは、これらのことを弟子たちに話されました。しかし、最初にもお話ししましたが、それは決して閉じられた場所で語られたものではありません。群衆のいる中で語られたのです。ということは、それが弟子たちだけに伝わればいいと考えたのではなく、広く一般の人々にもわかってもらいたいというイエスの願望があったのでしょう。そしてそのようにして、明るみに出された言葉を自らに語られた言葉として受け止め、自らの行動の規範にして欲しいというイエスの思いがあったのではないのでしょうか。

イエスが語った教え、“どんなことでも隠されたままにしていることはない”ということとはとても意味深いことです。これはファリサイ派の偽善だけの問題ではありません。イエスから 2000 年後の今の時代に生きる私たちの言動にも及ぶことです。私たちが日常の生活の中で行うこと、語るとは、たとえ隠された奥の間に語ったことでも、いずれ表に出され、すべての人の知るところとなります。いつまでも隠されたままにしていることはできないのです。だからこそ、私たちの語る言葉は神を信じる信仰者として相応しい言葉、つまり福音と神への賛美であるべきなのです。私たちはそのことを心に留め、常に自分自身の立ち居振る舞いに細心の注意を払わなければなりません。たとえそれが、誰の目に触れてもいない、誰の耳にも届いていないと

思っても、それを見ている方、聞いている方がいらっしやいます。それは私たちが愛してやまない主なる神です。神の御前で知られずに済むことはなく、露わにされないことはありません。信仰の名の下にそれを隠し通せるものではありません。信仰とは神の前に常に正しくあるべきことです。しかし私たち人間は間違いを犯すものです。それは仕方がないことです。しかしその間違いを認めて神に赦しを乞うならば、それは必ず聞き入れられることでしょう。

主なる神の愛は私たちが苦しめるのではなく、常に愛と赦しの中に導いてくださいます。そのことを心に置いてこの一週間も共に歩んでまいりましょう。共に祈りましょう。

神さま、私たちのしていることは、どんなことであっても明るみに出され、何よりも、主なる神さま、あなたがすべてのことをご存知です。神さまに対して、何時いかなる時も、心暗いことがないように、正しい道を歩むことができるように私たちは常にお導きください。

この祈り、私たちの造り主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げを致します。アーメン。

讚美歌:360「人の目には」

献金・感謝0・主の祈り(讚美歌 21 93-5A)

主なる御神、新しい年、主の御年 2026 年を迎え、早や、その最初の月も終わり近く、第四の主日を迎え、この朝、あなたの計り知れない大きな御憐れみと御慈しみによって、あなたが私どもを御堂に集め、またライブ配信により、共々に主日礼拝を献げる恵みと喜びとを与えてくださいましたこと心より感謝致します。

そして、この礼拝において大谷先生の口を通して、力強く御言葉を聞くことができ感謝致します。全てのものを明るみ出す神、あなたは私どもの、“白く塗りたる墓(マタ 23:27)、白く塗りたる壁(使 23:3)”の内なる有様も全てご存知です。私どもの罪の贖いのためにご受難へと赴かれる途上において、御子キリストが、御弟子らに諫められたこの言葉に私どもも導かれ、またあなたの御言葉、あなたの御約束を信じ、あなたの促しに心から従い行く従順をお与えくださいますように切に願ひ上げます。

そして今、再び、私どもをこの世へと遣わされようとしております。この混乱と悲慘に満ちる世で、“平和の主、再び来たり給う”を信じて、力強く歩むことができますようにあなたの御支えを切に願ひ上げます。

この礼拝に集うべくして集い得ない教会の肢々の上にあなたが豊かに臨んでくださいますように切に願ひ上げます。

私どもは、日々暮らし行く糧を豊に賜っております。今、その内から献身と感謝の徴として御前にお献げ致しました物を、どうか浄めて教会の御用のために、お用いくださいますように切に願ひ上げます。

今、再び、一巡りの日々へと歩み出そうとしております今、主の教えられた『主の祈り』を共に祈り献げて、その歩み出すとさせていただきますように。「主の祈り」…アーメン。

派遣: 讚美歌 92「主よ、わたしたちの主よ」

祝福: 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の豊かな交わりが、私たちの上に、いつまでもありますように。アーメン。

報告:《略》

後奏:「神の御子は来たり給う」(J.S. バッハ)